

集安山城子山城と高句麗中期都城

1. はじめに

中華人民共和国（以下、中国と略す）吉林省集安は高句麗中期（三世紀初～四二七年）の王都である。山城子山城は、王宮が存在したと推定される通溝城とともに、都城を構成する重要な城である（註1、図1）。

山城子山城に対する調査は、第二次大戦前の日本人による踏査を主にした調査（註2）があり、第二次大戦後には、中国による小規模な発掘調査が重ねられ、注目すべき成果もたらされている（註3）。

近年、世界遺産登録にともない、中国は、山城子山城など高句麗王都に関わる主要な遺跡に対して大規模な発掘調査を組織的に実施し、考古学的な知見の増大をもたらしつつもなった。この調査の成果は『丸都山城』（二〇〇四年）（註4、以下『丸都山城』と略記）ほかの報告書として刊行されている。

ここでは、『丸都山城』に報告された山城子山城の出土瓦に焦点をあてて、通溝城との比較で検討し、集安地域の高

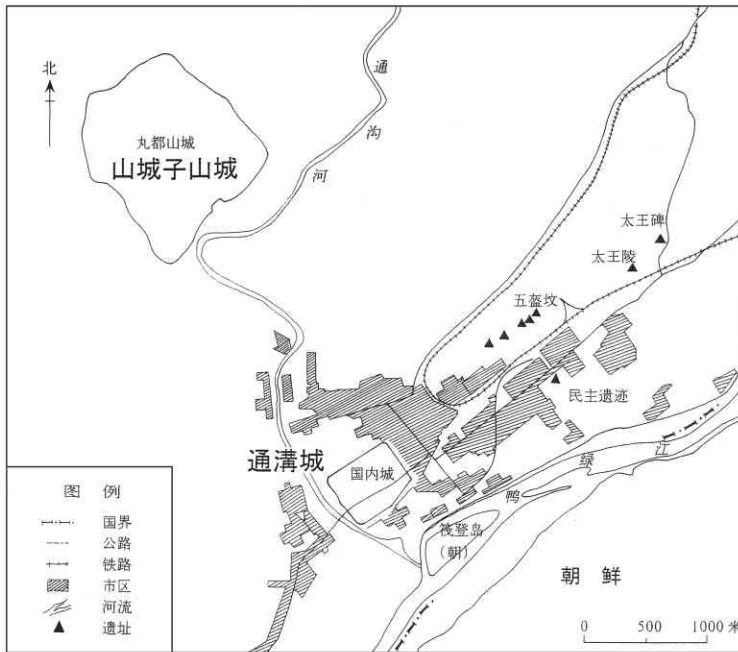


図1 山城子山城、通溝城の位置

千田剛道

句麗瓦編年にも言及し、集安における高句麗中期都城に関わる基本的な問題を考えてみたい。

なお、本稿では遺跡の呼称として、山城子山城（現地では丸都山城）および通溝城（現地では国内城）を使用する（註5）。

2. 山城子山城と出土瓦

山城子山城は、通溝城の北西約3キロメートルに位置する。周囲約7キロメートルにおよぶ大規模な山城である。石築城壁、城門址（7か所）のほか、城内には、池址、建物址（3か所）、古墳（38基）などの遺構がある。

今回の調査で、瓦をともなって検出された遺構は、次の5か所である。遺構の名称を『丸都山城』によって示す。

- 宮殿址
- 瞭望台址
- 戍卒居住址
- 1号門址
- 2号門址

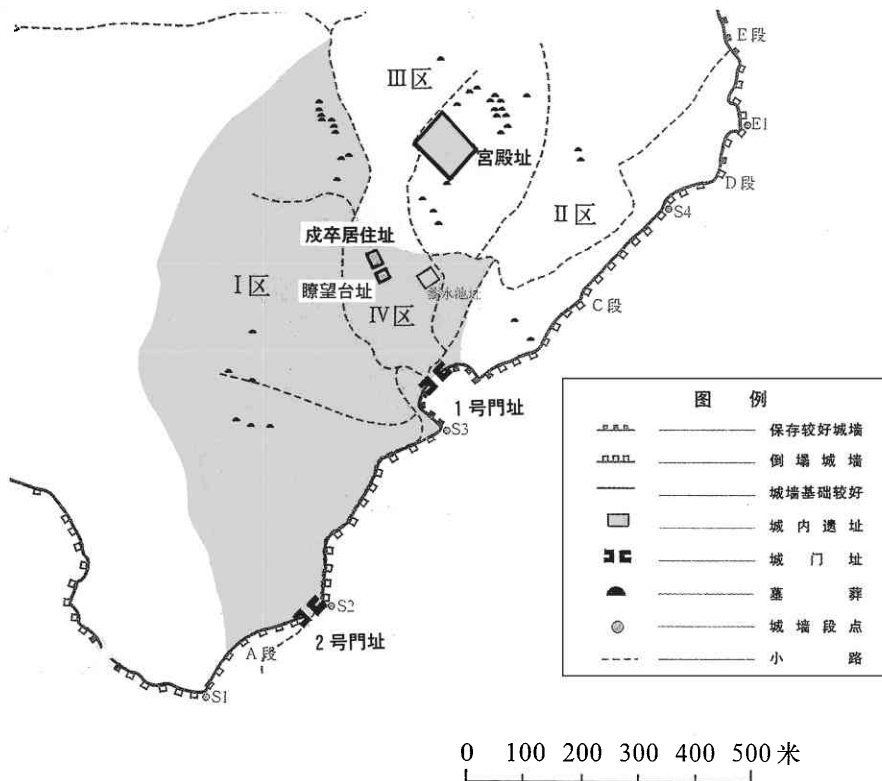


図2 瓦の出土した山城子山城の遺構

これらのうち、瓦当の出土している遺構は、「戌卒居住址」を除く4か所である（図2）。

出土した瓦当の種類を『丸都山城』によって示すと、獸面文（A、Ba、Bb、C）、忍冬文（細分なし）、蓮花文（A、B、C）の大別3種、細別では合計8種である。

これらの瓦当と出土遺構との関連は後で触れる通溝城出土瓦当とともに、表1に示した。これによって、遺構ごとの瓦当の種類（細別）をみると、宮殿址の8種が最も多く、2号門址の5種、1号門址の4種、瞭望台3種の順となる。

『丸都山城』以前の発掘調査で出土した山城子山城出土瓦当として図をともなつて報告されたのは獸面文瓦当（『丸都山城』の獸面文Ba型）がある^{〔註6〕}。このほか、第二次大戦前の採集資料にも山城子山城出土と伝える資料の報告がある^{〔註7〕}。

3. 獸面文、蓮花文瓦当、忍冬文、—通溝城出土瓦との比較—

山城子山城出土瓦の位置づけにあたっては、多くの型式を共有する通溝城出土瓦との比較が最も重要である。

通溝城については、第二次大戦前における踏査^{〔註8〕}の後、第二次大戦後に小規模な発掘がおこなわれて、注目すべき成果が報告されている^{〔註9〕}。近年、山城子山城とともに実施さ

れた大規模な発掘調査はさらに多くの情報をもたらした。ここでは、その報告『国内城』（二〇〇四年）^{〔註10〕}、以下『国内城』と略記）を中心にして、出土瓦の概要をみたい。

『国内城』によれば、通溝城の規模は、一辺約700メートルのほぼ方形に石築城壁がめぐり、城壁には城門、馬面などの施設が設けられている。城内を中心に、通溝城全域に設けられた発掘地21か所のうち、瓦当が出土したのは、13か所である（図3）。

瓦当文を大別で見ると、山城子山城と共通する獸面文、蓮花文、忍冬文瓦当のほか、山城子山城には出土しない卷雲文瓦当があり、また、渤海時代に降る瓦当も出土している。

瓦当の比較に際して、『国内城』では通溝城出土の瓦当には文様の細別名がつけられていないので『丸都山城』の細分名を援用する。山城子山城に見られない型式について、また『丸都山城』でも細分名のついていない型式については、便宜上、仮の細別名を付して検討することにする。

以下、文様毎に検討する。

まず、獸面文は、山城子山城で4種（このうち、Cは軒丸瓦当ではなく、日本の瓦の名称でいえば、鳥龕（とりぶすま）にあたるものと思われるが、便宜上、瓦当文の種類としてこれも含める。）あり、通溝城でも4種すべてが出土して

表1 山城子山城および通溝城の瓦当と遺構

	山城子山城					通溝城											
	宮殿址	瞭望台址	1号門址	2号門址	北城牆西門址	西牆門址	西牆外排水涵洞遺跡	審計局職工宿舍	蔬菜商場第2層	蔬菜商場第3層	市実験小学	電影公司	市第二小学	体育场	東市場地点石砌	東市場第3層	門球場
					A	B	C	③	⑧	⑧	⑩	⑪	⑫	⑭	⑮	⑮	⑯
獸面文	A	○	○	○	○	○	○				○						
	Ba	○	○	○	○							○		○			
	Bb	○					○	○									
	C	○						○									
蓮花文	A	○			○												
	B	○			○					○							
	C	○	○	○	○			○						○			
	仮イ														○		
忍冬文	仮イ	○		○				○						○			○
	仮口															○	○
卷雲文	B												○	○		○	
	B'							○	○	○				○			
渤海																○	○

いる。

蓮花文は、通溝城からは山城子山城の3種（A、B、C）のほか、山城子山城では知られていない種類（仮イ）が出土している。

忍冬文は、山城子山城では1種類（仮イ）のみであるが、通溝城では、山城子山城には知られていない種類（仮ロ）がある。

このほか、卷雲文瓦当、渤海瓦当については、前者は、以前検討した筆者の分類名^{〔註11〕}を示し、後者は、その存在を示すにとどめる（表1）。

4. 山城子山城と通溝城出土瓦当の編年

上述した細別を基礎にして、山城子山城および通溝城出土の瓦当の編年的な検討をおこなう。

山城子山城および通溝城出土瓦当は、そのみでは年代的な手ごりはほとんどない。集安の高句麗瓦当に関する研究をたどると、例えば、代表的な研究^{〔註12〕}では、集安の高句麗瓦の年代的下限を高句麗後期の王都平壤への遷都年代（四二七年）とするけれども、筆者の平壤地区の瓦編年^{〔註13〕}を合わせ考えると、このような考えは成立しないと考える。以下では、考古学的資料の比較による編年作業にも

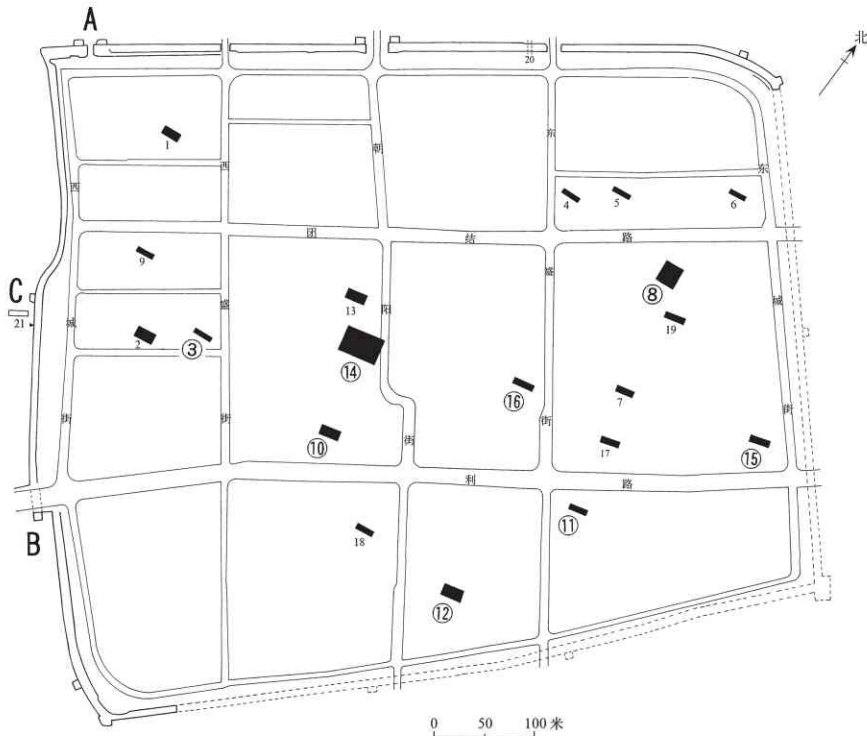


図3 通溝城の発掘地（太字：瓦当出土地）

とづいた年代推定をおこなう。

編年の構築にあたっては、まず、瓦当全体に通ずる文様構成の仕方による分類をこころみ、次いで、文様ごとに、細別とその変遷を追い、年代の推定に及ぶ、という手順を踏むことにする。

変遷の手がかりになる文様構成上の一番の特徴は、外圏線の有無である。獣面文、忍冬文、蓮花文を通じて、瓦当文様の変遷の方向を、外圏線のある種類↓ない種類へと推定する。つぎに、文様ごとの細別の可能性について言及しよう。

獣面文は、4種知られており、通溝城でもすべての種類が出土している。外圏線のあるA、BaとないBbとにわけることができる。なお、Cについては、先述したように鳥衾であり、編年の位置については別個の検討を要するので、ここでは触れない。

忍冬文は、通溝城では山城子山城に見られない種類が出土している(仮口)。外圏線はない上に、忍冬文自体を比較しても山城子山城の忍冬文瓦当が8単位の忍冬文からなるのに対して、通行城例は、文様単位数が少なく4単位かと推定される。

蓮花文は、通溝城では、山城子山城にない種類がある(仮イ)。Aに似るが、中房の周囲に隆線による円圈を巡らす点

が異なる。

このように、大きく、外圏線の有無によって、第1期↓第2期、という変遷を推定する。つぎに、第1期については、蓮花文の様相により、2小期に細分できよう。すなわち、蓮花の弁数が、9単位の種類(C)がある。奇数弁は偶数弁に遅れて出現すると考える。この中房の周りに隆線による円圈をめぐらす特徴に着目すれば、円圈のないAは、円圈のある(仮イ)とこのCに先行するものではないかと想定する。忍冬文に関しては、外圏線のない仮口が、第2期に属するのはよいとして、外圏線のある(仮イ)は、この細分とはどう関連するであろうか。ここでは、忍冬文(仮イ)は、中房に、隆線による円圈をとまなうことから、第1期第二小期に該当すると推定しておく。

以上のような検討結果を図示したのが図4である。

5. 集安における高句麗瓦編年

以上で、山城子山城の瓦について、通溝城の瓦とあわせて、編年的な検討をおこなった。

ただし、目を集安全域の高句麗瓦に転ずると、卷雲文瓦当は山城子山城からは出土せず、また、大型積石塚から出土する輻線を有する蓮花文瓦当も山城子山城からは出土が知られ

ていないなど、山城子山城、通溝城の編年だけで、集安全域の編年を語ることはできない。

ここでは、集安全域の高句麗瓦編年構築のため、山城子山城、通溝城以外の瓦もふくめて、卷雲文瓦当、蓮花文瓦当の順に検討をおこなう。

(一) 卷雲文瓦当の編年―卷雲文瓦当期―

卷雲文瓦当は、卷雲文を主文様とする瓦当で、蓮花文瓦当に先行する瓦当である。高句麗の領域では集安地域のみで出土し、平壤地域では出土が知られていない。

卷雲文瓦当は、瓦当文の特徴により、A、B、B'の3種に細分する^{〔註14〕}。『国内城』では、このうち、B類およびB'類の出土を報告している^{〔註15〕}。

編年にあたっては、卷雲文瓦当の時期は、全体として卷雲文瓦当期とし、A、B、B'をそれぞれ、第一、第二、第三期として細分しておきたい。

卷雲文瓦当全体を次のように分期する。

- 卷雲文瓦当第一期…卷雲文瓦当A類
- 卷雲文瓦当第二期…卷雲文瓦当B類
- 卷雲文瓦当第三期…卷雲文瓦当B'類











	獸面文	蓮花文	忍冬文	備考
第1期	-1 	A 		外圈線あり
	-2 	仮イ  C 	仮イ 	
第2期	Bb 	B 	仮口 	外圈線なし
	C 			

図4 獸面文、蓮花文、忍冬文瓦当（山城子山城、通溝城出土）の分類と編年

卷雲文瓦当には、年号または干支の銘文を有するものがあり、年代推定に有力な手掛かりとなる。以下にしめすように、「太寧四年」瓦当を最古に、他は、この型式からの変化型式とみて、次のような年代比定が可能である。

A類の「太寧四年」が三二五年または三二六年、干支銘では、B類の「己丑」が三二九年、「乙卯」が三五五年、「丁巳」が三五七年、に比定できることから、卷雲文瓦当は、四世紀前半に始まり、四世紀中頃から後半にかけて盛んに用いられたことがわかる。卷雲文瓦当の終末の年代推定に参考になるのは、千秋塚における卷雲文瓦当の様相である。千秋塚では、卷雲文瓦当B類が多量に出土する^(註16)。千秋塚で注目されるのは、のちに述べる輻線蓮花文第一類も出土していることである。大型積石塚で、卷雲文瓦当と蓮花文瓦当がともに出土しているのは、千秋塚に限られる。問題は、卷雲文瓦当の終末と蓮花文瓦当の出現が先後関係にあるのか、時期的に併存するかどうかであるが、両者の詳細な出土状況が不明であるので判断できない。しかし、B類が卷雲文瓦当の最終末の型式であることが傍証されることは重要であり、あえてB類の年代を推定するならば、四世紀後半とみて大過ないと思われる。

(二) 蓮花文瓦当の編年―蓮花文瓦当期―

卷雲文瓦当に続く瓦当編年は蓮花文瓦当期としてとらえることができる。

なお、獸面文、忍冬文については、蓮花文の編年を援用して位置づけることが可能であるので、編年の構築は蓮花文瓦当で代表させる。

集安地域における蓮花文瓦当は、山城子山城および、通溝城では知られていない種類がある。あらためて集安全域における蓮花文瓦当をみよう。

まず、輻線の有無により、2大別する。

(1) 輻線蓮花文瓦当の編年

輻線の様相により、2分する。

輻線蓮花文第一類…半球状の中房周囲に2重の圏線(内圏線)をめぐらし、内圏線から放射状にのびる2本一組または3本一組の輻線により瓦当面を六分割または八分割する。分割した中に蕾状の蓮花文および珠文2箇を配する。輻線の端には、2重の圏線(外圏線)をめぐらす。

輻線蓮花文第二類…輻線が1本になるか、または内圏線、外圏線が1重になる、あるいは外圏線を欠くなど、1類の定型的な構成が崩れるものを指す。

(2) 輻線のない蓮花文瓦当の編年

蓮花文の配置方法により、2分する。

主要文・従属文交互配置類・立体的な文様と平板な文様を交互に配置する。平板な文様は、前の時期にあった輻線と交代して出現したと推定する。

単一蓮花文配置類・平板な表現の文様が失われ、立体的な表現のみになる。文様の単位数が偶数のほかに、奇数のものも現われる。

(3) 蓮花文瓦当期の編年

蓮花文瓦当期全体を次のように分期する。

蓮花文瓦当第一期・輻線蓮花文第1類

蓮花文瓦当第二期・輻線蓮花文第2類

蓮花文瓦当第三期・輻線のない蓮花文瓦当

第一小期・主要文・従属文交互配置類

第二小期・単一蓮花文配置類

以上にしめした相対編年に対して、平壤地域の年代観^(註17)を援用して蓮花文瓦当全体の年代を推定する。第一期は、太王陵や千秋塚などの大型積石塚に始まり、平壤遷都(四二七年)初期の大城山城にも見られるから、四世紀後半から五世紀前半に推定できる。第三期とした瓦は、平壤地域では後期平壤城域での出土が知られる。後期平壤城(長安城)は、

五八六年に遷都した都城であるが、遷都自体五五二年には決定されている(『三国史記』陽原王8年条、五六六年に比定できる銘文城石の存在からも、実際の築造が六世紀中頃に始まる事が確認できる^(註18))。これにより第三期の上限は、六世紀半ば、下限は高句麗滅亡の六六八年までの幅でとらえられることになる。したがって、第二期の瓦は、その間、ほぼ五世紀後半から六世紀半ばごろにかけて、と推定できる。

(三) 集安における高句麗瓦当の編年

ここまで検討してきた、卷雲文瓦当期、蓮花文瓦当期をふくめ、集安における高句麗瓦当全体の編年をしめすと次のようになる。

卷雲文瓦当期・四世紀前半～四世紀後半

卷雲文瓦当第一期・A類 四世紀前半

卷雲文瓦当第二期・B類 四世紀前半～中頃

卷雲文瓦当第三期・B'類 四世紀後半

蓮花文瓦当期 四世紀後半～六六八年

蓮花文瓦当第一期・輻線蓮花文瓦当第1類

四世紀後半～五世紀後半

蓮花文瓦当第二期・輻線蓮花文瓦当第2類

五世紀後半～六世紀前半

蓮花文瓦当第三期…輻線のない蓮花文瓦当

六世紀前半～六六八年

第一小期…主要文・従属文交互配置類

六世紀前半から六世紀半ば

第二小期…単一蓮花文配置類

六世紀半ば～六六八年

6. おわりに

上述のように、集安の山城子山城の出土瓦は、高句麗中期都城期の下限四二七年をはるかに降り、六世紀半ば以降の年代を考えざるを得ない。

このことの高句麗都城研究にもたらす影響は少なくない。ここでは、山城とともに都城の重要な構成要素である平地城の通溝城の様相など、集安の高句麗都城遺跡の様相に関するいくつかの見通しを述べるにとどめる。

すなわち、通溝城の瓦を通観すると、多くは山城子山城と共通する獣面文、忍冬文、蓮花文瓦当であって、これらも同様に六世紀半ば以降の年代となる。これに対して通溝城では、山城子山城からは出土が知られていない巻雲文瓦当が出土しており、四世紀代前半から後半にかけての年代が想定できるところから、これこそが、高句麗中期都城期の瓦である。一

方、集安で王陵を含むと推定されている大型積石塚^{註17}から出土するような輻線をもつ蓮花文の瓦当は、山城子山城、通溝城ともに出土していない。すなわち、四世紀後半から五世紀の前半にかけて、いいかえれば、中期都城期の後半から、後期都城（四二七～六六八年）の前期平壤城期（四二七～五八六年）までの瓦が、通溝城では欠落していることにも注意を払う必要がある。

このほか問題の一例をあげれば、城壁の問題がある。山城子山城の石築城壁の築造年代は、城壁にひらく門にともなう瓦から推定できるが、再三述べてきたように、瓦の年代は、六世紀中頃を上限として、それ以降であり、後期都城の時期に降る。四二七年を下限とする中期都城期の山城子山城の城壁がいかなる様相であったのかなど中期都城にかかわる多くの重要な問題が生じてくる。

山城子山城の調査成果は、そのような諸問題をかんがえる上で、遺構、遺物における確実な年代上の一点を押さえることのできる貴重な資料である。

（追記）

本稿は、二〇一二年五月二五日、朝鮮古代研究会（於ハートピア京都）での発表「集安考古学の諸問題」、および

同年八月一七日、NPO法人国際文化財研究センター主催の第28回なみはや歴史講座（於…大阪韓国文化院）での発表「高句麗の都・集安を考える」をもとにまとめたものである。前者の会で、中村潤子、門田誠一、吉井秀夫、後者の会で、永島暉臣慎、福岡澄男、松井忠春の各氏に有益なご教示をいただき、成稿に際して鈴木拓也氏の助言を受けた。以上の方々に厚く感謝する。

【註】

1 集安への遷都年代ほか、高句麗中期都城の文献史的な検討は、田中俊明、一九九五年四月、「前期・中期の王都」、監修森浩一、編著東潮・田中俊明『高句麗の歴史と遺跡』、中央公論社、73～122頁、による。

2 池内宏、一九三八年一〇月、「山城子山城―丸都山城址」『通溝 卷上 滿洲國通化省輯安縣高句麗遺蹟』、日滿文化協會、23～31頁、

3 李殿福、一九八二年四月、「集安高句麗山城子山城調査與考略」、『文物攷古滙編』、第1期、吉林省文物工作隊、22～29頁

4 吉林省文物考古研究所・集安市博物館編著（主編 金旭東 副主編 李光日）、二〇〇四年六月、『丸都山城―二〇〇一～二〇〇三年集安丸都山城調査試掘報告』、文物出版社

5 これらの遺跡名と史料上の名称に関しては前掲註1、91～92頁参照。

6 「集安高句麗山城子山城調査與考略」（前掲註3）、25頁、図七。この調査では、多数の瓦当が出土しているが、図示のあるのはこの1点だけである。

7 朝鮮総督府、一九二五年三月、『朝鮮古蹟圖譜 一』「山城子山城址發見瓦」（一七六～一七八）には、獸面文3種（丸都山城）の獸面文A型、Ba型、C型、忍冬文1種（丸都山城）と共通）の写真があげられ、一九三八年10月、『通溝 卷上 滿洲國通化省輯安縣高句麗遺蹟』（前傾註2）図版第二二には、獸面文（丸都山城）の獸面文A型、忍冬文（丸都山城）と共通）、蓮花文（丸都山城）の蓮花文C型）3種の写真が掲載されている。

8 第二次大戦前における、まとまった踏査の報告は、一九三八年一〇月、池内宏「通溝城―丸都城址」、『通溝 卷上 滿洲國通化省輯安縣高句麗遺蹟』（前掲註2）、17～23頁、であって、採集瓦も収録されている。「通溝城 城内出土磚瓦」（図版第一二）にかかげられた瓦当は、蓮花文瓦当（後述の筆者の分類では輻線蓮花文第一類）と獸面文瓦当（丸都山城）のBa型）各1点である。なお、採集瓦についてはこれより先に刊行されている『朝鮮古蹟圖譜 一』（前掲註7）にも通溝城發見の忍

- 9 冬文瓦当写真1点が掲載されている（一六八 同城發見瓦本府蔵）。『丸都山城』の忍冬文と共通する型式である。
- 『国内城』以前に刊行された中国の発掘報告には次のようなものがある。①集安県文物保管所、一九八四年、「集安高句麗国内城址的調査與試掘」、『文物』一九八四年第一期、47～54頁、②董峰、一九九三年七月、「国内城中新發現的遺址和遺物」、『高句麗研究文集』、延边大学出版社、189～198頁、③吉林省文物考古研究所・集安市文物保管所、二〇〇三年、「吉林集安高句麗国内城馬面址清理簡報」、『北方文物』、二〇〇三年／第3期、33～34頁。いずれの調査でも瓦が出土しているが、図示がない。なお、①には、一九六四年に「浴池」の改修時に出土した「太寧四年」の銘文をもつ卷雲文瓦当（筆者の分類ではA類）が紹介されている（49頁、図五）。
- 10 吉林省文物考古研究所・集安市博物館（主編 宋玉彬）、二〇〇四年六月、『国内城 二〇〇〇～二〇〇三年集安国内城與民主遺址試掘報告』、文物出版社
- 11 千田剛道、二〇一二年一月、「集安高句麗卷雲文瓦の編年をめぐって」、『第23回東アジア古代史・考古学研究交流会予稿集』、東アジア考古学会、7～14頁。以下、卷雲文瓦当に関する詳細は、これによりたい。
- 12 林至徳・耿鉄華、一九八五年、「集安出土の高句麗瓦当及其年代」、『考古』、一九八五／七、644～653頁。中国で刊行された高句麗考古学関係の著述でも、基本的にこの研究によっている。例えば、魏存成、一九九四年六月、『高句麗考古』、吉林大学出版社、など。近年では、王飛峰、夏増威、二〇〇八年、「高句麗丸都山城瓦当研究」、『東北史地』、二〇〇八第二期、67～74頁、においてもこの見解を踏襲し、「丸都山城」の瓦の年代を「四世紀末—四二七年」とする（72頁）。
- 13 千田剛道、二〇一〇年一二月、「高句麗瓦研究の二、三の問題—清岩里土城の瓦と平壤地域の瓦編年—」、『第22回東アジア古代史・考古学研究会交流会 地域発表及び初期須恵器窯の諸様相—予稿集—』、大阪朝鮮考古学研究会、13～19頁
- 14 前掲註11
- 15 前掲註10の5、79、101、126、131頁
- 16 吉林省文物考古研究所・集安市博物館編著（主編 傅佳欣 副主編 王洪峰）、二〇〇四年六月、『集安高句麗王陵 一九九〇～二〇〇三年集安高句麗王陵調査報告』、文物出版社、の「千秋墓」（168～216頁）
- 17 前掲註13
- 18 田中俊明、「長安城（後期平壤城）」、前掲註1、225～242頁

図・表出典

図1 山城子山城、通溝城の位置

『国内城』6頁、図一に「山城子山城」、「通溝城」を追記

図2 瓦の出土した山城子山城の遺構

『丸都山城』6頁、図三をもとに、太字で表示

図3 通溝城の発掘地（太字・瓦当出土地）

『国内城』10頁、図五をもとに、瓦当出土地を「A」、「B」、「C」、および丸囲み数字で示した。

図4 獣面文、蓮花文、忍冬文瓦当（山城子山城、通溝城出土）の分類と編年

『丸都山城』および『国内城』により作成

表1 山城子山城および通溝城の瓦当と遺構

『丸都山城』および『国内城』により作成

「A」、「B」、「C」を追記